

「君は餘り、如何して其様に冷淡なんだ。」

「僕は既ういやになつたんです。」と、元二は垂頭いたまゝ、投出した様に云つた。

「何が可厭になつたと云ふのかね。」

勝彌は眉を顰めたまゝ、元二の返辭を待つて居た。

元二は暫時黙つて居たが、云泥むと云つた語調で、

「先生に怒られるか知れませんが、僕は此様滿らない生活には飽いちまつたんです。ですから、如何でも成るまゝに成るが可いと思つて居るんです。父さんや母さんが何處へ行つたはうとも、さうなるべき運命だと思へば其までなんです。僕がさうさせたく無いと思つたして、僕には何の力も無いんですから、如何しようつて事も出来ななし……だから、母さんがお云ひの事だけを聞いて、僕の方からは何にも聞かなかつたんです。よし聞いたつても、どうせ滿らない事に違ひありませんからね。」

元二は斯う云ひながらも眼には何時か一杯涙を堪へて居た。

勝彌は元二の意志の弱い事も、何を成すべき力の無い事も知つて居るから、彼が終に此

様事を云ふ迄に煩悶えて居ると知ては、同情の念が起らないではない。けれども、元二は此様事を云つて居る時では無い。今一步を誤れば、終世救ふべからざる境に墮ちて了ふのである。と思つたので、態と冷かな笑を浮べた。

「元二君、君は何を云つてるのかね。君は其様弱い事を云つて、其で可いものと思つてるのか。」

「可か不可か知りませんが、僕はもう考へたつて詰らないと思ふから、考へない意です。先生から御覽なすつたら、僕見たいに意氣地の無い奴は無いでせう。ですけども、僕は意氣地が無くなつたつて詮方が無いと諦めて居るんです。」と、ぼろ／＼と落ちる涙を拭いて居る。

「そんな事ちや不可ね。僕は君にいろ／＼云ひたい事があるけれども、今は云はない。君が何に感じて其様事を云ふのか知らないが、まア靜かに考へて見たまへ。君が氣を鎮けて充分考へた上で、尙ほ其様事を云ふんなら、其時僕は大きいに論じるかも知れないけれども、今日は何にも云はない。併し、君は其様事ちやア不可よ。まア充分考へて見たまへ。」



「僕は充分考へて見たんですけれども、」

「まだ足りないんだ。今日は其様事は云はないとして、御祖母さんに兎に角お話しした方が可いよ。」

「え、と、元二は尙ほ涙を拭いて居る。」

「兄さんく。」と、美都子が茶の間から呼んだ。

元二は返辭もしないで尙ほ垂頭いて居た。

「何か用があるんだらうから行つて見たまへ。君がお祖母さんに話し難ければ、僕が代つてお話をしても可い。兎も角も茶の間へ行つて見やうぢやアないか。」

勝彌が促しながら立つたので、元二はいやく／＼さうに其後に從いて行つた。

勝彌が先づ口を切つて、重勝とお瀧が今日明日は勿論、當分歸宅しないばかりでなく、何處か田舎の方へ行く様子である事を、千代刀と美都子に話を爲ると、二人とも驚き呆れて暫時は語も出し得なんだ。

「何と云ふ事でせう。親や子供の事も思はないんですかね。先生、貴方にも面目ない事ばかり

しお聞かせ申します。」

千代刀は面に怒氣を見はしても、眼には涙を見せぬ様に勉めて居るらしかつたが、美都子は既う袖に涙を掩うて居た。

「兄さん、何だつて母さんを連れて來なかつて。母さまが田舎なんかへ行らッしやらうつて云ふのに、行先も聞かないで別れるなんて、餘り酷い事よ。」

「そんな事を言つたつて詮議があるものか。父さんや母さんが僕達を捨て、田舎へ行つたはうてんだもの、止めたつて詮議が無いぢやアないか。」と、元二は憤然らしく云つた。

「だつて、行らッしやる先ぐらゐ聞くのは當然よ。」

「そんな事を云ふなら、自分で聞いて來るが可いや。」と、横を向いた。

「御祖母さま、私長谷の宅まで行つて來てよ。」

美都子は直ぐにも出掛けさうな見脈で立上る。千代刀はあはて、止めて、

「不可せん。お前が一人で長谷の宅なんぞへ行つて如何するんだよ。お前が一人で行つて御覽、お前まで歸れなくなつて了ふよ。長谷ッて云ふ奴は、お前を引出さう／＼ッて掛つ



てたんだから、お前が行つて御覧なさい、此方から態々係蹄に罹りに行く様なものだよ。お前は如何しても遣る事は出来ません。お祖母さんの傍に落着いてお居なさい。」

「ちやア、兄さんに行つて貰つて頂戴。」と、美都子は千代乃の傍に坐つて、泣ながら云ふ。元二が行かうと云はねば、千代乃も行けとは云はないで黙つて考へて居た。

「此儘擲放つて置く譯には行かんでせうから、僕が出掛けて行つてお目に掛つて見ませうよ。さうしたら、母さん方の御意向も知れるでせうし、何處へお行でなさるか、其も知れよう云ふものです。兎に角僕が出掛ける事に爲ませう。」

「先生に行つて戴けば結構ですが、餘り恐入りますね。」

「そんな事は無いです。元二君、僕は長谷と云ふ人の宅を知らないから、君一緒に行つて呉れないか。」

「僕もですか。」と進まない顔をした。

「元二、先生のお供を爲てお行で。」

「僕は行つたつて云ふ事が無いんだ。」と、ぶツとして居る。

「御話は僕が爲るから、君は唯案内者の意で行つて呉れば可いんだ。」

「長谷の宅は御徒士町の一丁目の、電車の停留場の近所で、直き知れるんです。」

「直き知れるかも知れないけれども、君は兎に角同行して呉れたまへ。早い方が可いせうから、直ぐ出掛けませう。」

「御苦勞さまで御在ります。お漕だけでも無理にもお連れなされる様に願ひますよ。」

「兄さん、父さまも母さまも是非歸つて戴いて頂戴よ。」

勝彌は直ぐ仕度を爲て、元二を促して長谷が家へと出掛けた。

(五八)

御徒士町一丁目の大溝に沿うた小徑を東に入つて、板橋様の危さうな橋を渡ると、格子戸作の見附の小綺麗な、三間か四間もあらうかと思はるゝ家の入口に、長谷徳三と大城流の楷書で書いた陶標が掛けてある。



元二は此家の前に歩を止めて勝彌を見返つた。  
勝彌は標札を仰いで見て、

「なか／＼綺麗な家だね。君が母さんに迷ひに來た意で、案内を乞うて見るんだ。」

「僕がですか。」と、いやさうだ。

「聲を掛けて見たまへ。」

「へい。」と、元二は尙ほいやさうに躊躇つて居た。

勝彌は格子戸を能く手荒く開けて内に入ると共に、御免と聲を掛けた。

聞こえたのか聞こえないのか、人の居る氣勢は爲ながらも答が無い。

元二は上口の障子を開けながら、

「何人も居ないんですか。」

「元二ぢやア無いかい。」と、奥から問返したのはお瀧の聲だ。

「さうです。先生と御一緒に來たんです。」

「八能木さんが御一緒なの。今直きに行くから、一寸待つてお呉れ。」

奥では何か呟き合つてゐる様な氣勢が爲たが、聽て唐紙の開く音が爲て、足音は一間斜に廻りもするか聞こえて、玄關脇の唐紙を開けて出て來たのはお瀧だ。

お瀧は愛想よき笑顔を作りながら、

「先生、よく入らして下さいましたはねえ。さア何卒お上り遊ばして下さい。元二、お前もお上り。」

元二は膨れ面を爲て黙つて居た。

「父さんも居らっしゃるでせうね。」

勝彌がお瀧の顔を凝乎と見ると、お瀧は眼を翳した。

「生憎今朝出掛けました。」

「長谷君は居られるでせうな。」

「長谷さんも留守ですよ。」

勝彌は首肯き元二を見返つて、

「上つても差支ありませんですか。」



「えい、／＼差支なんかある筈がありませんは。」

「では、暫時御邪魔を致します。元二君、上りたまへ。」

勝彌先づ上り元二これに続き、お瀧の案内で座敷に通つた。

「元二、其座布団を先生に上げてお呉れ。お前も敷いて下さいよ。一寸失禮します。」

お瀧は次へ行つて了つた。

元二は室隅に重ねてあつた格子縞の郡内の座布団二枚を持つて来て、勝彌にも進め自分も敷いた。

勝彌は床の文晁と落駄のある壽老人の幅やら、けばくしい花鳥の模様のある出雲焼の花瓶やら、偽物の三洲の額やらを見廻し、長谷と云ふ奴は何様事をして此様生活を爲て居るのかと思ひながら、お瀧の出で来るのを待つて居た。

茶の間らしく察せらるゝ次の間から、茶碗の觸れ合ふ音や、湯をさす音の間に人の呶合ふ様な氣勢が聞こえて、暫時すると十五六の濞皮のひけた小女が火鉢を運んで来ると、續いてお瀧が茶を運んで来て二人に進めた。小女は二人の様子をしげじげと見ながら退いた。

「母さんは僕や美都子を捨て、何處へ行くんです。」

元二は激し切つた様子で突掛る様に云つた。

「だれがお前さんや美都ちゃんを捨てるもんですか。お前さんの様に、突如剣突をお喰せだと、返辭に困りますよ。」と、お瀧は態と微笑を浮めた。

「だれが剣突なんぞ喰はせるもんか。父さんや母さんが餘り無法だから、僕だつても、」

「そんなに怒らないだつて、話は分りますよ。何卒ね、もつと靜かに話を爲てお呉れでないか。さうしてお呉れでないで、母さんは種々な心配が盛つてゐるんだからね、かアツと逆上せて了つて、何が何だか解らなくなるんだよ。何卒靜かに話して下さいよ。」

「だつて、餘り無法なんだから、僕だつて激するのは當然だ。」

「それを怒らないで話してお呉れと頼んでるんですよ。」

「だつて、」

「元二君、待ちたまへ。君見たいに、母さまに御話を爲るのに、宛然喧嘩腰では困るぢやアないかね。激さないだつて談話は解るんだから、靜かに爲た方が可いよ。」



勝彌が和めても元二は尙ほ同じ語調で、

「御祖母さまは、母さんを引張つて歸つて來いて云つてなすらう。」

「それは眞箇です。」と、勝彌が受けて、「御祖母様は非常に御心配なすつてお居です。それも無理は無いです。巢鴨からお歸りなると、父さんも母さんも御留守で、而も昨夜御歸りが無かつたでせう。それで一層心配してお居でなすつた處に、元二君が母さんに途中で御目に掛つて、父さんも母さんも、田舎とかへお出掛けだと云ふ御傳言ですから、御祖母さまが御心配なさるのも御無理は無いと思ふんです。僕も實は大いに驚いたんです。美都子さんは唯だ泣いて居るんですよ。」

お瀧は術なさうに垂向いて何とも云はない。

「美都子は先生が引受けて下さるから可いけれども、御祖母さまや僕は放擲ッといても可いんですか。」

「可いとは思はないさ。だけれども、父さんも母さんも揃つて意氣地なしたから、如何ッて爲様が無いんだよ。」

「爲様が無いと云やそれ迄だけれども、」

「眞箇爲様が無いんだからねえ。お前も悪く思つてお呉れでないよ。」

「悪く思ふなと云つたッても、」

「だけれども、母さんの方も察してお呉れ。」と、お瀧は袂から塵紙を出して鼻をかんだ。

勝彌はお瀧の寝れた顔、術なさうな様を見て、如何にも氣の毒だと思つた。

「お前も知つてお居での通、父さんに何を爲さらうッて働きも無いんだし、私は女の事だし、収入が無くツて支出ばかりなしたから、今の儘ちや到底道ツてき様が無いんだものねえ。だから、昔の領地へ行ツて、何とか工風を爲て來たいと思ふんだよ。」

「昔の領地へツて。」と、元二に眼を丸くして、「去年叔父さんが行つて耻辱を受けたんぢやアないか。」

「長夫さんと私と一緒にする事も無からうからねえ。」

「當になるもんか。止すが可いよ。」

元二は冷笑つた。



「本當に當になるもんか。止した方が可いよ。」  
お瀧が黙つて居るので、元二は重ねて斯う叫んだ。

「それはお前さんのお云ひの通り。止した方が可いかも知れないんさ。」と、お瀧は如何でもなれと云つた様な語調で云つた。だけれどもね、止したからって、他に如何ツて的があるんぢやアなしさ。母さんには此上もう繰廻しようが無いんだからねえ。」

「だって、耻辱をかきに行つたッて詮様が無いや。」

「だけども、然様定つてる譯では無いんだからねえ。」

「それが自惚なんだ。叔父さんが好い手本ぢやアないか。何にでも自惚れてるもんだから、能々耻辱をかきに出掛けて行つたんだ。母さんまで能々叔父さんの真似を爲に行かなくつたッて可いよ。」

「それは然様ですとも。」

「それに第一何なんだ。母さんなんぞ時世の變遷を知らないから不可いんだよ。昔は御領主さまだッて、それは此方で思つてるだけで、先方ぢや如何思つてるか知れやアしない

だらう。東京を喰詰めて來やがつて位に思ふかも知れないや。」

「其様事があるもんかね。お前も随分な事をお云ひだねえ、喰詰者たア何だよ。」

「だッて、さう思はないに限らないだらう。ねえ、先生。」

勝彌は何とも云はないで苦笑をした。

「田舎の人はお前の思つてる様なものぢやアないよ。お前がお生れたッた時なんか、昔の大莊屋が態々祝儀を述ひに出京た位なんだよ。」

「それは何時なんだよ。」

「お前がお生れの時さ。」

「ぢやア、二十年前だらう。だから、母さんは時世の變遷を云ふ事を知らないんだよ。」

「よしんば二十年が三十年経つたッても、田舎の人ッてものは、お前がお考への様な事は無いよ。」

「それならば何だ、其後だッて年始状態は寄越しさうなものぢやアないか。だけども、僕が覚えてから、其様ものの來た事なんかありやアしない。」



元二が斯う云ふと、お瀧も等ひかねる様な気がして黙つて了つた。

勝彌は今が好機だと思つた。

「母さん、斯うなすツちや如何ですか。假令舊領地の方へ御出掛けなさるにしても、一應歸宅を下さつて、御祖母さまと能く御相談なすつた上の事になすツちや如何でせう。御祖母さまは、實際非常に心配してお居でなさんです。」

「どう爲ても能う御座んすけごもね……。」「と、お瀧はさう爲たくなさうな様子で考へて居る。

「母さん、何も考へる事は無いよ、先生の仰有る通りに、御祖母さまと相談した上に爲た方が可いよ。」

元二も糊めたけれども、お瀧は直ぐ應へば云はずに考へて居る。

「母さん、僕も切角斯うして伺つたんですから、兎に角一應歸宅つて戴きたいのですがなア。」

勝彌が斯う云ふと、お瀧は疑子と其顔を見た。

「久能木さん、貴方如何云ふ氣で、美都子を貰つて下すつたんですか。」

お瀧の問が意外だったので、勝彌は直ぐには返辭を爲し得ず、元二は驚きの眼を睜つた。

「久能木先生、貴方何様御考で美都子を貰つて下さいまして。其御意中を伺ひたいもので御座いますねえ。」

お瀧の語調も、口邊に微笑を含んださまも、惜いほど冷かに見えた。

「母さんは何だつて解りきつた事を聞くんです。」「と、元二は眼を睜つたまゝ云つた。

「解りきつてる事には違ひないんさ。だけれども、美都ちゃんのだらけ一ツは、父さんや母さんが此様に苦勞しないだつて済んでるんだよ。」

「母さんは何を云ふんだ。」

「何を云ふつてお前、私は思つてる通を云ふのよ。」

「母さんは其だから、僕は可厭になつたんだ。」「と元二は眼色を變へ唇頭を頰にした。

お瀧は斷えず嘲る様な微笑を浮べて、垂頭いて考へて居る勝彌をじろく／＼と見ながら、  
「お前さんが今可厭にお成りよりかも、母さんなんぞ疾から死んだら死んだらと思つてる位



だよ。お前さんなんぞ、御飯は人がお膳を据ゑて呉れて食べるもんだと思つてお居でだけれどもね、其御膳を据ゑる方の人の意中になつて考へて御覽、今夜は如何爲よう明朝は如何爲ようツて苦勞ツてものはね、お前さんなんぞには考へられもしないほど辛いものなんだよ。それはね、美都ちやんの事だツても、母さんの云ふ事を唯利慾の爲ばかりだとお聞きだつたら、餘りさもしい様で可厭になつてお了ひだらうけれども、母さんの心地になつても考へて見ても呉れよ。美都ちやんは既う久能木さんのお嫁さんに上げて了つたから詮方が無いけれども、せめて御祖母さまやお前ぐらゐは美都ちやんの縁で、如何にか世を送つて行つてお呉れだ、私と父さんだけなら、何處へ行つたツても御飯ぐらゐは食へてかれようと思ふのさ。だから、美都ちやんは何卒相當のところへ……斯う云つたツても、先生を輕蔑する譯では無いんですよ。先生だツても、まだ極つた収入がおありなさるんぢやアなし、お祖母さまやお前まで御願申すとはねえ、私にだつて云へなからうぢやアないかね。先生も悪く思はないで下さいよ。」

「いや、能く解りました。」と、勝彌は云ひたい事もあるが、態を何にも云はぬと覺悟して、「それにしても、一應御歸り下さる事に願ひたいのです。御祖母様は云ふ迄もない事ですが、都合に依つては元二君も御引受する意で居たんですよ。それも此も、一應御祖母さまと御同席のところ、改めて御相談を致したいと思ふのです。母さんの御意中は、僕にも能く解りましたから、其積で充分御相談を願はうぢやありませんか。兎に角一應御歸り下さる譯にはまゐりますまいか。元二君、君からも御願ひするが可いよ。」

元二は母の語から一層勝彌に對してきまりが悪いので、今勝彌が注意を與へても何も云ひたくないのです、唯口をもぐぐらせて居た。

「母さん、兎に角一應御歸宅を願ひたいのです。これが御祖母さま始め一同の希望です。」  
 「かうもね、歸宅ると申す譯には……歸宅れば歸つたで、又いろ／＼な支障が起るに極つてますからねえ。」

「ぢやア、母さんは如何しても歸らないで云ふんだね。」と、元二は怒鳴る様に云つた。  
 「どうも、私は歸らうと思つたツて歸れないんだから、お前さんは先生と御一緒に歸つてお呉れ。」



お瀧は元二に斯う云つて置いて勝彌に對ひ、

「先生が御祖母さんや元二を引受けて下さる氣で居て下されば、私達もそれだけは助かるんですから、何卒よろしく御願申しますよ。」

「それはお言葉でも無いのです。」

「ですけれどもねえ、」と、お瀧は滴らなさうにも口惜さうにも、而も平氣らしくも思はれる様な語調で「私達だつても、美都子と此様風で別にならうとは思はなかつたんですよ。それも貴方の御蔭ですはねえ。本統に難有いんですよ。ほ、ほ。」

勝彌は此上の侮辱があらうか、乃公は此でも尙ほ忍んで居なければならぬのか、寧ろ美都子を兩親の手に渡して了はうかとも思つたが、そんな事を爲てはならぬ。美都子は如何してもお前が救はねばならぬのだと、心の中に何者か命ずる様で、乃公は美都子を救ふ爲になら、何様侮辱も甘んじて受けるのだと云ふ氣になつて、お瀧の嘲笑に對しても反抗しようとはせずに黙つて居た。

「母さんは如何したつて歸らないつて云ふんだね。御祖母さんや美都子や僕を捨てても。」

と、元二は之を長期の語だと云ひさうな見脈だつた。

「捨つて譯ぢやありませんよ。御祖母さまやお前さんや美都ちゃんは先生が引受けて下さるんだもの。父さんや母さんが附いてるよりか、何様に安心だか知れないよ。」

「ぢやア、如何しても、歸らないで、田舎へ行くんですね。」

「今のところ何もねえ、さうするよりか詮方が無いんさ。」

「ぢやア、勝手にお爲なさい。先生歸りませう。」

「まア待ちたまへ。」と、勝彌は今一應はと膝を進めて、「御祖母さまの御心中をお考へ下さつて、兎に角御逢ひなすつた上で御出掛なすつては如何ですか、僕も折角御祖母さまの御依頼を受けて伺つたんですから、此儘引取のも残念です。何卒一應は、」

「切角ですがねえ、さう云ふ譯には行かないんですよ。御祖母さんに逢へば止められるに極つてますし、止られて留てりや、また先般からの苦勞を繰返さなまアならないでせう。私にはもう其様勇氣は到底ありませんよ。貴方には御氣の毒ですけども、何卒よろしく御願ひ申しますよ。」と元二を見返り、「御祖母さんや美都ちゃんに、お前さんからも罷うく云つ



てお呉れよ。』

「能くなんて云へるもんか。」と元二は眼を潤まして居る。

「此程申上げても御承引が無いんですから、残念ですが御暇致します。」

「剛情な事はかし申して済みませんでしたねえ。何卒よろしくお願ひ申しますよ。」

「何時お出發になるのですか。」

「今日になりますか、明日になりますか、確とした事は申上げられません。」

「時々御音信だけは、せめて御祖母さまだけになり為すつて下さる様に願ひます。」

「え、成たけね。」と、お流は垂頭いた。

「元二君、お暇しよう。」

「え。」

元二は母の顔を凝乎と睨む様に見て座を立つ、勝彌も續いて立つ。お流は二人を支那に送出して、暫時は其後影を見送つて居た。

(五九)

勝彌は原宿の家に歸るのだから、青山四丁目の電車の停留場まで來るのが便利なのに、御所前で元二を促して電車を下りた。

元二は怪幻な顔を爲ながら、

「何か御用があるんですか。」

「なにに然様ではないかね……君に少し聞きたい事があるんだよ。」

勝彌は電車のレールに沿うて陸軍大學校の方へ行く。

元二は何となく不安に思ひながら、勝彌に従いて歩いて歩いて居たが、

「先生、僕にお聞きなされる事があるつて、何様事ですか。」

勝彌は元二を見返つたばかりで何とも云はず、應て大學校の角を屈ると打開けた練兵場が夕日に映えて、端の兵營が平生よりは低く且つ遠く霞んで見える。



元二は覺えず肩を窄めて、

「寒い風だなア。」

「なに寒い。僕は快い心地だよ。君は風邪を引いたんぢやアないかね。彼を見たまへ、彼處には、襦袢一枚で野球をやつてる人達さへあるよ。」

「風邪なんか大丈夫ですけれど」と云ひながら大きな噴を一つした。

「それ見たまへ、屹度風邪を引いたんだ。だが君何だせ、注意して呉れんさやア不可よ。

今の場合、君が寝る様な事があつちやア困るよ。僕も大いに注意するから、君も別して注意して呉れたまへよ。君や僕ばかりぢやない、何人が病氣になつても困る。僕は今日以後必死になつて奮闘するから、君も僕を助けて大に奮つて呉れたまへ。」

「先生が爲るつて仰有る事なら、僕は何様事でも爲る決心です。」

「君が其決心で居て呉れ、ば、僕も心丈夫だ。それに就いて、君に聞きたい事があるんだよ。」

突如にそれッ〜と叫ぶ聲が聞こえたので、二人が驚きながら返振ると、外野手が逸し

たゴロが反跳を爲ながら元二の足下に轉じて來た。元二は野球の心得はないけれども、覺えず體を屈めて手を伸ばすと、技巧にも其球を取り得た。

「君。」

元二が追うて來た外野手を見ながら球を示すと、投げてよと云はぬばかりに手を伸ばす。それと元二が投げた球を見事にクローブに収めた時、彼方に盛んなる喝采が二回まで續いて起つたのは、敵の走者が二人まで生還爲たらしかつた。

勝彌は眉を揚げて彼方を望みながら、

「中學生の仕合らしいが、野球に狂する時代に、今一度成て見たい。」

「先生は野球を爲すつたんですか。」

「爲たともさ……やッ。見たまへ。打つたよ……惜いッ、フライになつた。」

「取られたですな。」と、元二も熱心に見て居たが、俄かに顔色を變へて、先生太田先生です。」

「なに、太田が……さうだ紫瘦君だ。」



紫瘦は野球の仕合を見て居て、圖らず勝彌等を認めたらしく、ラインの外一間ばかりの處を此方へ歩いて來るのである。

紫瘦は近くまゝに、

「久能木君、散歩かね。」

「あゝ。」

勝彌も紫瘦を迎へ顔に其方へと歩むた。

元二は元の處に佇んで居た。

「彼は柏木君だね。」

紫瘦は凝乎と元二を見た。元二は熱心に仕合を見て居た。

「君は此から直ぐ宅へ歸るんだらうね。」

「うん。」

「後刻に訪ねる意だが、差支はあるまひね。」

「差支なんかありやアしない。如何だ、直ぐ一緒に來ちや。」

「いや、他に一軒寄らなきやアならない所があるんでね。南町の五丁目なんだ。歸途に訪問るよ。」

「待つてるから來たまへ。」

紫瘦が元二の佇立んでる前を通るので、帽子を脱ると、唯頭を傾げるほどの會釋を爲て行つて了つた。

「元二君、行かう。」

勝彌は垂頭しながら歩出した。元二は其後に従きながら、

「太田先生は、先生をお訪ねなさるんぢやなかつたんですか。」

「後刻に來訪ねるとか云つてたよ。元二君、僕と駢んぢや如何かね。」

「え、」と、急いで勝彌に肩を駢べた。

「君は先日は何處へ行つてたのかね。」

「え、何日ですか。」

「僕の代に兒玉へ行つて呉れた彼時よ。」



「へい。」とばかりで元二は口籠った。

「彼時直ぐ聞かうと思つたけれども、種々な事が繰出したもんだから、今日まで放擲ツといたんだよ……美都子さんには葉嶋へ行く様な事を云つて置いて、御祖母さんに聞くと來はかつたと言はれたんだが……友人の下宿に泊つたとか云ふ様な事を君は云つてるさうだが、君、それに相違ないのかね。」

元二は顔を赧くして聞いて居たが、此時きつぱりした語調で、

「さうです、友人の下宿に泊つたんです。」

「それに相違ないんだね。」

「相違ありません。」

「君が宅に歸らなかつた彼間、太田の妻君も宅に居なかつたと云ふんだ。」

勝彌は這乎と元二の横顔を見た。元二も勝彌の顔を見返しながら、

「太田の奥さんがお居でなさらなかつたから、如何だと仰有るんですか。」

「如何と云ふ事は無い。君に疚しいところさへなきやア重畳だ。」

元二は涙含んだ。

「先生は僕を疑つて居らっしゃるんですか。」

「僕は君を疑はうとは思はない。けれども、太田は如何か知れないね。」

「太田さんなんぞに疑れたつて、僕は何とも思はんですけれども……先生が少しでも……。」

と、聲が顫へた。

「僕は今も云つたが、決して君を疑ひたくはない。併し、他から少しも疑はれてる事に氣が付いたら、別して注意せんさやアなるまひね。」

「注意するつて、如何すれば可いんです。」と、元二の語調は激して來た。

「如何すれば可いと云つて、成たけ都根子に近づかない様にするんだ。」

「僕が何時近いた事があります。」と、ますます激して來た。

「さう激さんでも可いだらう。」

「いえ、外の事とは違ひます。」

勝彌が元二の顔を見ると、頬には涙が流れて居た。



「君の方から近く様に云つたのは僕が悪かつた。勘辨したまへ。併し、都根子から近くにし  
てもだね、君が充分注意さへして居れば、」

「僕が注意して居ないと仰有るんですか。僕は成るべく避ける様に／＼と、今日まで充  
分注意して来た意なんです。僕は彼人に十二社に誘はれようとした事もあります、大森の  
海岸へ行かないかと誘はれた事もあつたんですけれども、僕は一度だつて應じた事はあり  
ません。四谷に住た頃なんぞ、能く僕の出入を待受けて居ては、種々な誘惑を試みられた  
事がありますけれども、僕は何時も拒絶して居たんです。先生、僕は決して虚言は云はな  
いんですよ。先生に對して虚言を云ふまでに墮落しちや居ない意です。太田の妻君の事で  
先生に疑はれるかと思ふと、僕は實に残念です。」

元二は情の激するまゝに、聲高に止度なく辯解した。

勝彌はそれで可い／＼と幾度か支へながら駢んで歩いて居たが、

「解つたから、もう何にも云ひたまふな。君に悪いところは無い、都根子こそ憎むべきでは  
あるけれども、紫瘦は如何思つて居るか分らないから、今後は一層注意して呉れたまへ

よ。」

「注意しますとも。彼人が今後も僕を誘ふ様な事がありましたら、もう遠慮しては居ませ  
ん、其場で罵倒して遣る事にします。僕を先生にまで疑はせる様にしたのは、彼女の爲で  
すから、僕は面を見たら唾を吐掛けて遣ります。」

「其様事を爲ちや不可よ。併し、其位な心は有つて居て呉れるが可いんだ。」

「彼女なんぞ、男を何と思つて居るんでせう。誘ひさへすれば、誰でも應じるもんだと思つ  
てるんですか知ら。」

「水鏡や権一見た様な男が、世間には多いんだからねえ。」と、苦笑を爲ながら、「併し、太田  
の妻君は多少怒すべき點が無いでもない。」

「怒すべき點なぞあるもんですか。」

「いや、紫瘦にも罪があるんだからねえ。」

「彼先生には罪があるかも知れないですが、彼先生の罪と僕とは何の交渉もないんですの  
だ。」



「それは、君が美しく生得いたのが累を爲してゐるんだ。」

「先生、また其様事を仰有るんですか。」と、怨む様な語調になつた。

「それと今一つは、君が年少ではあるし、自分の弟ごでも遊んでる様で、それが彼人を樂ませるのかも知れないね。」

「ちやア、僕を玩弄物にしようてんですね。」

「悪く云へば然様も云へる。」

「失敬な奴だ。今度逢つたら、」

「粗暴な事を爲ちや不可よ。相手にならない様に注意してりや可いんだからね。」

遠く喝采の聲が聞こえたので、二人は覺えず見返ると、彼の野球團の仕合が尙ほ續けられて居るらしく、遙の彼方に動いて居た。

「早く歸つて御祖母さまにお話を爲なまやアならないんだ。だが、何様に失望なさるか知れないね。」

「どうです。僕は父と母が憎くツて爲様がありません。」

「そんな事を云つたツて爲様が無い。これから二人で奮闘すりや如何にかなるさ。兎に角急いで歸らなよ。」

二人は四聊隊の兵營に沿うて原宿へと辿り入るのであつた。

(六〇)

「親や子供も捨て了つて、自分達ばかりが如何にか成れば可いと云ふんですね。如何して其様心になつたんで御在ませうねえ。」

千代乃は勝彌からお瀧の様子を聞いて、憤怒と失望の餘に斯う云つた。

「父さんや母さんは駄目だから、此方は此方で遣る方が可いんだ。御祖母さま、もう詮方が無いと思つてお了ひなさい。」と、元二が云つた。

「母さまは、如何しても歸るのは否だツてお云ひなすツて。」と、美都子は潤聲だ。

「だから諦めるより詮方が無いんだ。」



「如何していせう。」

「心まで零落れて了つたからだよ。」と、千代乃の聲も盛つた。

美都子は袖を顔に當てた。

「併し、父さんや母さんの方にも、苦しい事情があるんですね。お察しすると、僕は却つて御氣の毒だと思つてるんです。」

「よしんば何様事情がありませうとも、親子供に近代へるッて事が、」

「いえ、然様では無いのです。せめて御自分達だけでも別になれば、それだけ口が減るかどう云ふ様な意味でした。」

「其が間違つてるぢやありませんか。よしんば食く物が無いまでも一緒に居て、死ぬのも一緒に云ふのが、親子の情を云ふものでせう。」

「おほきに然様です。併し、父さんや母さんは御自分達は如何ならうとも、田舎へ行つて一層愛目を見ようとも、御祖母さまや元二君なんぞは然様させたくない云ふ御考だらうと思ふんです。」

「然様か知ら。」と、元二は頭を傾げた。

「僕には然様とより解釋が出来ないよ。だからね、君と僕とが大いに奮つて、御祖母さまに出来るだけの孝行をするんだ。ね、解つたらう。美都子さん、貴女も其決心で、私や元二君を扶けて呉れなきやア不可よ。」

「えへ。」と、美都子は顔に袖を當てたまへ首肯した。

千代乃は塵紙で鼻をかむ音を高くさせ、尙ほ咳に涙を紛らして居た。格子戸の開く音が爲て聲を掛けたのは紫瘦だ。

「久能木君は在宅ですか。」

「あゝ居るよ。上りたまへ。」と、勝彌は立上りながら、「元二君、火鉢に火と、それから後で茶を持つて来て呉れたまへ。」

紫瘦は座敷に誘はれながら、

「彼時から直ぐに歸つたかね。能く居て呉れたね。」

「君も能く来て呉れたね。」



紫瘦は體を捨る様に力なげに坐つて、

「いよ／＼決行する事にしたよ。」と云つて、嘲る様な笑を浮めた。

「決行する事にしたつて、何をかね。」と、勝彌は其意を覺りながら能と問ふて見た。

「都根子の一件さ。今媒酌人の家に行つて來たんだよ。」

「さうかね。如何しても其處まで行かなきゃアならなくなつたんだね。」

「如何も止むを得んさ。」

「君が決心したのなら、僕は止めませんが、豫じめ妻君に話を爲たのかね。」

「無論爲たとも。其結果が此に來たんだよ。」

「それならば止を得んだ。併し、君も氣の毒な人だね。」

紫瘦は垂頭して太息を吐いた。

「元二君、く。」

「唯今。」

「早く頼むよ。」

「太田先生入來ッしやい。」

元二は火鉢を持つて來て二人の間に置いて、斯う云ひながら叩頭をした。

紫瘦は會釋を返しながらじろりと元二を見て、

「君が惡意に爲て遣つて呉れたが都根子も、いよ／＼生家へ返す事に爲たよ。」

元二は屹度紫瘦を見返して何か云ひたげにしたが、勝彌が目配で制へたので、突と立つ

て茶の間へ退いた。

「彼人は女の好きさうな美しい顔を爲てるね。」

勝彌は苦笑を爲ながら、

「面ばかりに惚れる女ばかりでも無いのさ。」

「だが、先づ其が過半だらう。」

「さう極つて見ると、僕なんぞ先づ落第かな。」

紫瘦は不快な顔を爲た。

美都子が茶を持つて來て紫瘦に進めると、紫瘦は美都子がさまりを惡がるほど其顔を



しげくと見て、「大層御無沙汰を爲しました。御祖母さんは御變もありませんか。」

「はい、御蔭さまで。」とばかりで垂頭いた。

「美都子さん、」と、紫瘦は更つて美都子を呼掛けて、「貴方に末長く御友達に爲て戴かうと思つてた都根子ですな、今度いよく生家へ返す事にしました。」

「まア……其様御戲言を。」と、既に茶の間でも聞いて居たのだから、いよく其様氣の毒な事になつたのかと、他の事ではあるけれども胸が迫る様に覺えたのに、今また當面聞かされると、一層氣の毒になつて、態ど斯うも云つて見た。

勝彌は紫瘦が一々吹聴しなくも可いのに、或ひは尙ほ未練が残つて居るからかも知れぬとも思つた。

「いや、戲言ぢやないんですよ。今日いよく其事に決して來たんですよ。」

「奥さまが御可愛相うですは。」

「可愛相ですツて。ははは。それは彼女に云ふべき語では無いのです。」

「まア酷い事を。」

勝彌は美都子が應待に困つて居るのを見て、

「何か菓子は無かつたですか。」

「はい。」

美都子は辛と立端を得て、ほつと息を吐きながら退いた。

「美都子さんは何時見ても美しいね。それに如何にも温順やかで可い。都根子も美都子さんの様な性質だツたら、僕も今日の苦痛を嘗めなくツて濟んだかも知れない。女に學問なんぞ有つても無くツても可い。唯温順で貞淑であつてさへ呉れれば可いんだね。僕が都根子を選んだのは誤つて居たんだ。夫の仕事に興味も有たなきや、同情も有たない女と來ちやア、妻としての資格は零なんだ。」

勝彌は黙つて居た。

「久能木君、君は美都子さんと早晚結婚するだらうね。」

「其つもりだ。而も事情があつて、其期を早めなきやアならないかも知れない。」

「早い方が可い。」



紫瘦は何か深く考へて居る様子であつたが、

「兒玉も結婚したさうだし、君も近日結婚するッて云ふのに、僕だけが却つて孤獨の生活に入るんだ。人生は妙なものだねえ。」

「併し、君と僕と何方が幸福か分らないんだ。」

「それも左様だ。併し……いやもう止さう。今日はまだ種々用があつたんだ。これで失敬する。明日から淋しくなるんだから、ちと話に来て呉れたまへ。」

「行くとも。」

「では、失敬する。」

紫瘦は辭し去つた。

勝彌が紫瘦の辭去を見送つて、自分の紙巻蓑の袋を取りに座敷に来ると、其處には千代乃が何時の間に入つて来たのか、火鉢の傍に坐つて居た。

「先生、太田さんも御氣の毒ですね。」

「さうです。併し、今日となつては止むを得ないでせう。」

「さうで御在ますかねえ。」と、千代乃は太息を吐いて、「頃日の様に可厭な事はかし耳にしますと、何處か世間の事の聞こえない、山の中にも入つて了ひたくなりますよ。」

「そんな事を仰有らないで、まア僕等が此から爲る事を見て居て戴きませう。」と、勝彌は微笑ひで見せた。

「まったく先生ばかりが頼で御在ますよ。」

「如何なるか知らんですが、出来るだけの奮闘は……働いては見る意で居ます。」

勝彌が敷島の袋を持つて三疊へ行かうと立上るのを、

「先生、御話を願ひたい事がありますが、今御用がおおりなさるなら、後刻でも可う御在ますければ。」

「今伺ひませう。」と、坐つた。

千代乃はゆつくりと蓑を一吹喫んで、如何にも沈着いた語調で、

「今迄通でも可い様なものですけれども、私も何時までも氣掛になる様で、今一步落着な様に思ひますのですよ。」



「はい。」と、千代乃の顔を凝乎と見た。

「元二も早く然様して戴いた方が可いッて申しますし、」と、やゝ躊躇ひながら「美都子と式だけでも済まして戴きたいので御在ますがねえ。」

「其事ですか。」と、勝彌も少時躊躇つたが、「承知しました。實は最少し如何かしてからと思つて居たんですが、事情が此様工合になつて來たんですから、御祖母さま始め其方が可いと云ふ御考なら、僕に異存はありません。」

千代乃は嬉さを其皺枯れた面に溢らしながら、

「私もこれで安心で御在ます。元二も何様に心強く思ふか知れませんが。」

「併し、僕は残念だと思ふんです。實は結婚する前に、美都子さんに出来るだけの教育を爲て置きたかつたんですよ。結婚して丁ふと、自然其方が疎略になりさうで不本意です。」  
千代乃も今後は其夫に連れる相當の學問が無ければ、其妻としての立場が危い様にも思ふ。今勝彌から斯う云はれると、一層其感を深めるのであつたが、美都子の素直な性質や賤からの氣品に、勝彌が不斷の訓誡を加へたなら、久能木家の女主人として立つて行かれ

ない事もあるまいとも思ふ。それに自分が傍に居る事の出来る中は、萬事に氣を着けて、勝彌の面目に拘はる様な事はさせない。美都子も亦夫の面皮を汚す様な事を爲る子で無い。それに勝彌の頼母しい性質は、必ず美都子を羞しくない様に世に立てて呉るに違ないと信じてる。それやこれやを思ふと、勝彌が今少し學問を爲せて置きたいと云ふのに無理は無いけれども、自分が心配してる様な事は眞箇の取越苦勞かも知れない。兎に角結婚さへさせて了へば、自分の大役が済んで了ふ様に思はれて、唯嬉しさが先に立つのであつた。

千代乃が元二を呼んで此事を話すと、元二も大いに喜んだ。

「いよく然様なると、何だね、父さんや母さんには立會つて貰ふ方が可いんだがね。」

「然様願つた方が可いです。」と、勝彌は千代乃の意中を察して賛成した。

「彼様情を知らない、父さんや母さんに來て貰ふ事は無い。」と、元二は未だ激した心が和らぐぬらしい。

「君の様に云ふものぢやアない。御祖母さまの御召思に委せるが可い。」

「元二や、親の心ツてもものは、また別なだからね、父さんや母さんに來て貰ふが可いんだ



よ。美都子だッても其方が嬉しからうから、お前御苦勞だけれどもね、長谷の宅へ行つて来てお呉れでないか。』

「僕は御免だ。』

「お前の様でも困るねえ。』

で、重勝夫婦には千代乃から郵書で知らせる事にして、次には媒妁人を何人にしたものかとの相談に移つた。

「媒妁は夫婦揃つてる人でなくちやア不可ですか。』

「それに越した事はありませんね。』

「太田だと可いけれども、今日では其も駄目だし、林はまだ獨身だし……僕には心當が無いです。』

千代乃も考へて居たが、心當はあつても今は疎遠になつて居たりなぞして、これならばと思ふのが無いので困じて居た。

「媒妁なんぞ入らないぢやアないか、ねえ御祖母さん。先生に美都子を貰つて戴く事に爲

たんだッて、何人も口を利いたんぢやアないだらう。』

「其は然様だけれども、お前がお云ひの様に手輕にして置く譯の者でないだからねえ。』

「御祖母さまにお心當は無いですか。』

「もし當りましてねえ。』

「では、如何でせう。獨身ではあるですが、林にしては如何でせう。彼男なら此方の事情も熟く知つてるんですし、美都子さんと結婚する事も豫ねて賛成して居たんですから。』

「林さんが可い。』と、元二は大いに賛成した。

媒妁は林に極める事になつたが、何時式を擧げるかと云ふ點に至ると、第一其費用から調へた上でなければ、何とも決し難い。

「今後一週間、先づ十日ばかり待つて戴く事にしたいです。僕は其間に充分準備を整へたのでせう。』

「用意と云つたつても、どうせ時節が時節ですから、大した事をなさらないだッて、』

「いえ、兎に角僕にとつても美都子さんに取つても一生の大禮なんです。今日の僕の力に



出来るだけの事をして、大禮の記念にしたいと思ひます。」

「然様して戴けば難有う御任ますすれども、」

「兎に角一週間御待ち下さい。それと、父さんや母さんの方は、それ迄田舎へお出でが無い様に、御祖母さまから直ぐ御手紙を御出し下さい。」

「これから直ぐに書きます。」

千代乃がいそぐと茶の間に入ると、美都子は先刻からの三人の談話を聞いて居たらし、祖母が入つて来ると、赧くした顔を背向けながら用ありさうに臺所へ行つて了つた。

勝彌は其夜林國雄を訪うて、いよゝ美都子と結婚の式を挙げるに決したと云ふ事について、迷惑ながら媒妁人になつて貰ひたいと、思つて來た事を話すと、國雄は一應母と相談した上で、快く勝彌の請を諾した。

勝彌が今夜國雄を訪ねたのは、まだ他にも依頼したい事があつたので、其は日外勝彌の小説を掲載して呉れた新聞社に、今一度前同様の相談を爲て貰ひたいと云ふ事で、幾度となく君を勞しては濟まないけれども、場合が場合だから出来るだけの盡力を頼みたいと餘

議なさうに頼むのであつた。

「さうかね、それには丁度好い事があるんだよ。君が頼まないだつて、先方から君に何か書いて貰つて呉れと頼んで來て居るんだよ。實は今日にも君を訪ねようと思つて居たところなんだよ。」

勝彌は國雄の語の虚實に迷ふほど意外だつたので、其喜も尋常ではなかつた。

「實に意外だ。併し、此度都合な事は無い。僕は今夜歸ると直ぐに稿を起す事にして、遅くも一週内には脱稿する意だから、君も何卒其合で、稿料は直ぐ受取れる様に心配して置いてくれたまへ。」

「よろしい。彼社の主筆が大いに君の作物に惚れてるんだから、事情を話せば屹度承知する。」

「何分頼むよ。」

勝彌は其夜から稿を起した。書かうと勉めながらも、昨日までは想も筆も伸びなかつたのに、今夜は不思議にも思ふまゝに書いて行ける。興に乗つて終に徹夜したのであ



るが、翌朝寢に就くまでには十回近く出来て居た。

午後勝彌が床を離れると、お瀧から返事が来て居て、二人の結婚には喜びこそすれ無論異存は無い。當日は必ず其席に列なることにする。尤も其前から傍に居て種々世話を爲たことは思ふけれども、事情が許さないので、御迷惑ながら御祖母さまに萬事お願ひ申しますとの主意であることを、千代乃は其手紙を勝彌に見せながら話した。

其方も其で可い。今は自分が原稿を書上げるだけの事になった。昨夜からの調子に乗つて、今日は今から明朝まで昨日以上の成効を得たいものだ、勝彌は飯を食うと直ぐに机に向つて、翌朝までには果して昨夜以上の好成績を得たのであつた。此勢でくく其夜も其次の夜も徹夜の執筆を續けて、五日目には五十回の大園圖までの稿を脱し得たのであつた。

「元二君、御苦勞だが、之を林の宅に届けて呉れたまへ。それからね、別に手紙は上げないが、先日お頼みした事は宜く盡力を願ふと云つたつて云つて呉れたまへ。」

元二は喜んで林の宅へ急いだ。其夕方には林が社から直ぐに來たのだと云つて、百金近く

の稿料を届けて呉れた。

「林君、僕は今日ほど愉快な事は無いよ。これは君の賜物だ。謝するに辭が無い位だ。」

「なに僕に謝す事は無いさ。君の努力の結果に過ぎんのだよ。」

「さう云つて呉れると、尙ほ謝さんさやアならない。元二君く。」

勝彌は元二を呼んで、今得た稿料の半を裂き、其を紙に包んで、

「之を母さんに届けて來て呉れたまへ。」

元二は唯吃驚して居る。

「父さんや母さんの方にも、種々必要があらうと思ふから、直ぐに上げて來て呉れたまへ。」元二は反對した。元二から此事を聞いた千代乃も反對したけれども、勝彌は終に強て元二をして重勝夫婦の許へ其金を送らせる事にした。

國雄も人々と協議の席に列りて、式を擧げるのは明後日の夕六時と云ふ事に定めた。國雄が辭し去ると同時に、元二も父母の許へ出て行つた。元二が歸つたのは其夜の八時頃で、其云ふところに依ると、丁度父も母も長谷の家に居合せて、深く勝彌の好意を謝し、



明後日は朝から手傳かたぐい歸り來ると云ふ事であつたさうな。勝彌も然様して貰へば心懸が無くて可いと喜び、千代乃にしても美都子にしても勝彌に幾倍も嬉しいか知れないのである。

式を擧げるとは云ふものゝ、ほんの内輪だけの心ゆかしに爲ようと云ふのだから、勝彌は眞岡木綿の紋付の羽織、美都子は袖が何かの矢絰の小袖を新調したと云ふだけで、千代乃が世が世であつたらと泣いたのも無理は無い。

今の境遇を差支て、柏木家の親戚としては一人も招かなかつた。尤も、此前から殆んど交際を絶つて居たも同様で、それと云ふのも重勝とお瀧の仕向が悪かつたからだ、千代乃の折々の愚痴が漏されて居た。で、媒妁人として林國雄、友人として太田紫瘦が其席に列なるだけで、勝彌の親戚としては東京に一人も無いのだから、列なるものゝ無いのも止むを得ないのである。長夫さへも生憎地方に出張して居て、列席する事が出来なかつた。

床には國雄と紫瘦とが今日を祝の贈物が置かれたので、他には何にも無い。唯三寶に魔斗と土盃が載せてあるのと、瀬戸の銚子が置いてあるだけだが、それでも人の世の春が

来た様な心地は爲た。

既に六時を過ぎたのに、今朝から來る約束の美都子の父母が來ない。七時まで待つたけれども依然影も見せない。八時近くなつた時お瀧の名で一葉の端書が届いた。それは横濱の停車場の鐵道郵便の消印のあるもので、急に出發しなければならぬ事情があつて、今夜の事が氣に掛りながら東京を去ると云ふ意味が書いてあつた。

「まア何と云ふ事だせう。」と、千代乃は睨を頻打いた。

「僕は斯うだらうと思つてたんだ。」と、元二は澁面作つた様なべそをかいた様な顔をした。

美都子は唯垂頭して居ても云はない。

「よく〜の御事情なんでせう。その中には其事情も解るでせうから、まア心配なさらんが可いんです。」と勝彌は人々を慰めて置いて、「では、早く式を擧げる事にしますかな。林や太田を何時までも待たせるのは氣の毒ですから。」

「貴方には誠に申譯が有ません。」



千代乃の詫びるのも勝彌は態を聞かぬ振をして、國雄を呼んで直ぐに式を擧げる事にして呉れと云つた。

式と云ふのも至極手軽に済まされた。此様事で、乃公と美都子は新生涯に入り得たのだらうかと勝彌は頼無きような滑稽な様な感があった。

式後は無禮講、友人同士寄合つて小宴を催してると同様の態度で、今夜は寛々飲んで呉れたまへ、大いに飲むよと云ふ調子になつた。

紫瘦は火照る様になつた頬を撫でながら、

「蒼川君、人生と云ふものは不思議なものだね。君と僕の此一年間の變化を回顧ふと、人の行末と云ふものは、全然分らないんだね。」

「さうだね。併し、君が幸福か僕が不幸か分らないさ。今後一年経つたら、何が何となくなつたかも知れないよ。林君なんでも、今日の林君では無くなるかも知れないね。」

「さうだとも。君は新に家庭を作るのに、僕は放浪生活に入るんだからね。林君、君も早く家庭の人となるが可いでせう。」

「僕なんぞ當分現狀維持だ。」

「それも可い。」と、勝彌は幾平と考へて居たが、「紫瘦君、放浪生活に入るとしても、家庭を作るにしても、結局は努力の生涯なんだね。僕も努力するが、君も努力したまへ。」

「うむ。」

紫瘦は淋しさうな顔をして垂頭いた。

茶の間に座敷の談話を聞いて居た千代乃は、無邪氣な顔を爲て燭をつけて居る美都子を見ながら、何と云ふ事はなしに溜息を吐いた。

## 人 大尾



本編漫然人と題せしも種當ならず、既に  
 して一段落と改めんとせしに、編首は既  
 に印刷を了りし後にて、改むるに由なく、  
 其儘になし置く事としたり。讀む人此意  
 を諒せられん事を乞ふ。

蒼々園柳派識

明治四十二年十二月二十五日印刷  
 明治四十三年一月五日發行

特製金紙  
 上製金葉四七拾圓



著作者 廣津柳 溟  
 發行者 東京市麹町區平河町五丁目五番地 金尾淵堂  
 發行所 大阪府東區北波邊町 杉本梁江堂  
 印刷者 東京市麹町區有樂町二丁目一番地 中村政所  
 印刷所 右 報文社 雄要耶溟

發兌元  
 發兌元

東京市麹町區平河町五丁目五番地 金尾淵堂  
 (振替東京三八一七)  
 大阪府東區北波邊町 杉本梁江堂  
 (振替東京二八二三)

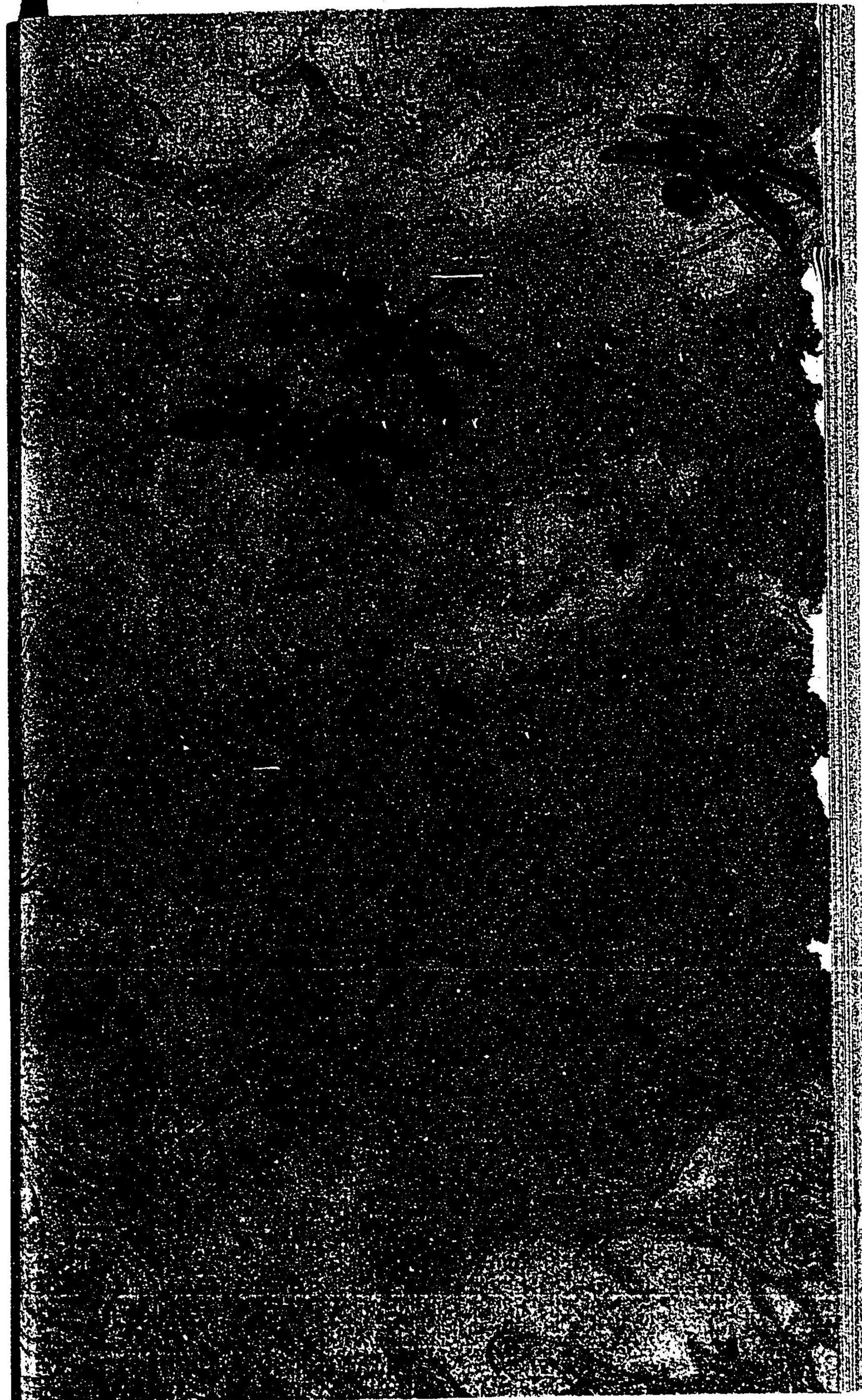


文淵堂發兌圖書賣元

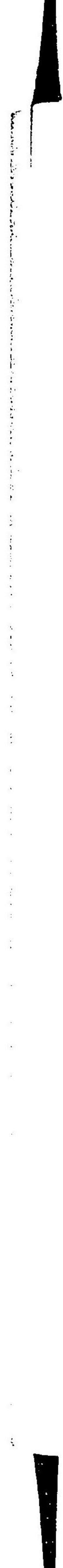
東京市神田區表神保町  
 同 神田區宍神保町  
 同 日本橋區吳服町  
 同 日本橋區本銀町  
 同 日本橋區大傳馬町  
 同 日本橋區本石町  
 同 京橋區仲橋廣小路  
 同 京橋區鎗屋町  
 大阪市東區備後町  
 大阪市北區東梅田町  
 京都市烏丸佛光寺  
 名古屋市玉屋町  
 久留米市米屋町  
 熊本市新屋町  
 韓國京城本町二丁目  
 關東州大連

東京堂  
 上田書屋  
 北隆書館  
 大塚洋書堂  
 淺見誠堂  
 加島榮堂  
 前川文堂  
 東海堂  
 吉岡寶文館  
 盛文書房  
 東枝津書房  
 星野文星堂  
 菊竹文次  
 長崎書房  
 大日堂  
 大阪屋號

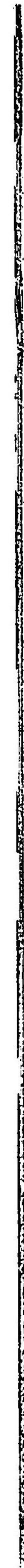
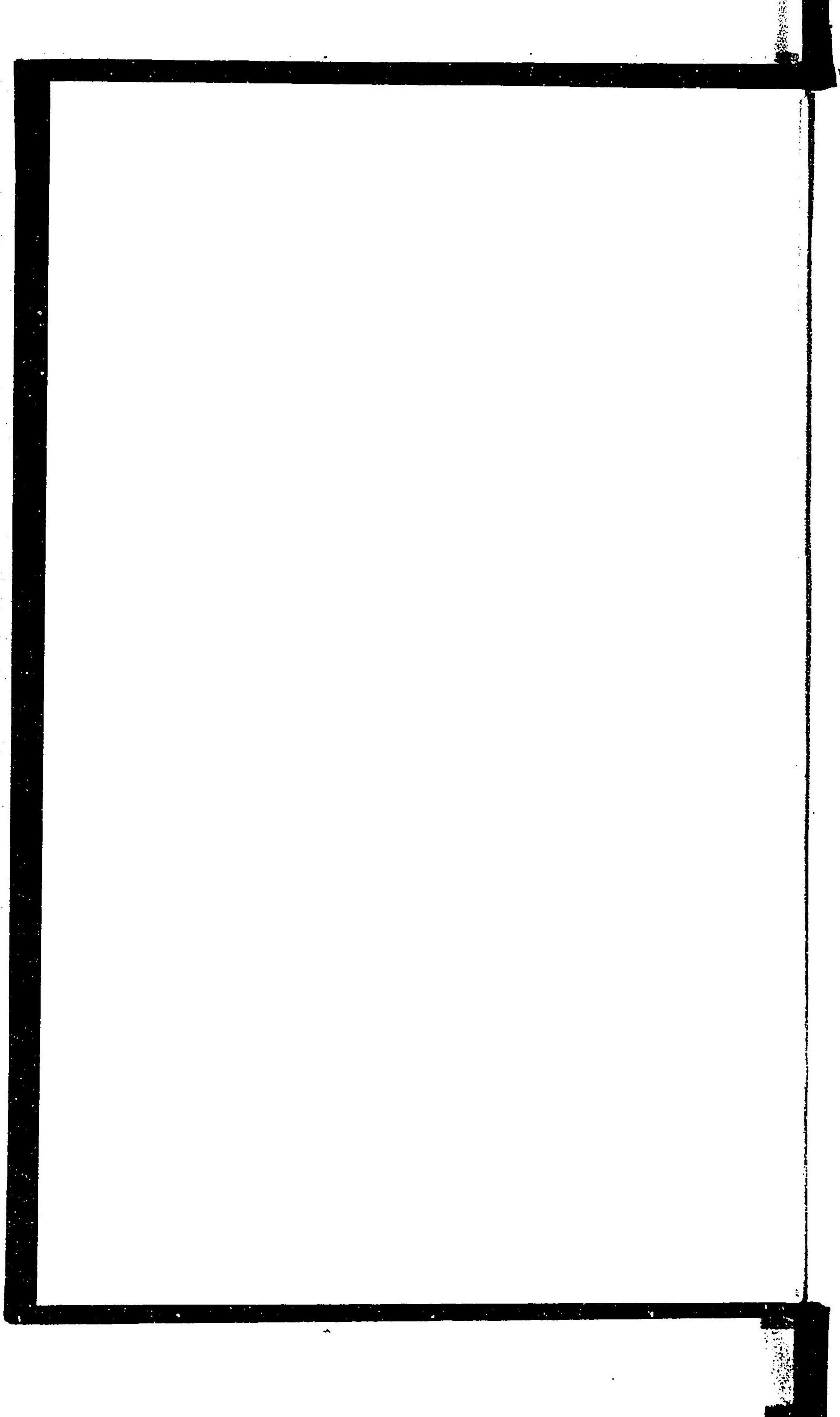




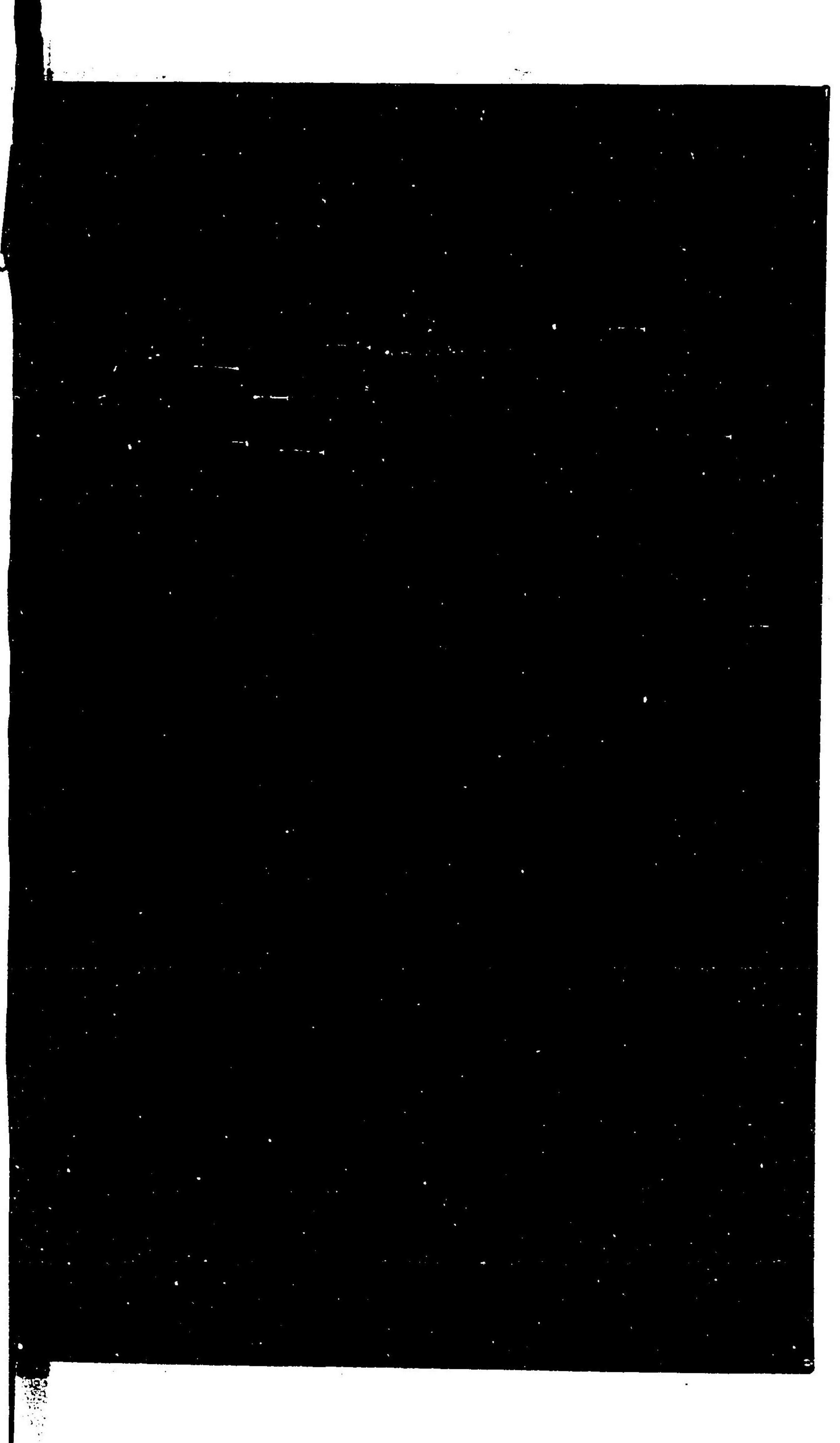














329

33

095104-000-5

329-33

人

広津 柳浪/著

M43

DBQ-2712





